



Title	1920~30年代におけるアメリカ少年赤十字の国際通信交換（二）：運動の規模
Author(s)	ベレジコワ, タチアナ
Citation	間谷論集. 2023, 17, p. 91-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91366
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究ノート〉

1920～30年代におけるアメリカ少年赤十字の 国際通信交換（二）

——運動の規模——

ベレジコワ タチアナ

〈キーワード〉 少年赤十字 アメリカ 国際文化交流 国際通信交換

1. はじめに

少年赤十字は、赤十字という人道団体の下部組織として1922年に正式に創立された団体である。第一次世界大戦中、アメリカ、カナダ、オーストラリアに始まった少年赤十字の活動は、戦争の犠牲者となったヨーロッパの子どもたちの救護や、赤十字団員の活動の補助を中心としたものであった。カナダとオーストラリアは、当時イギリス連邦の一員として1914年に第一次世界大戦に参戦し、ヨーロッパへ軍を派遣した。兵士の救済活動に直ちに取りかかったのは、イギリス連邦赤十字のカナダ支部とオーストラリア支部の団員であった。両支部の活動を援助するために、1915年¹にカナダのサスカチュワン州に、1916年にはオーストラリアのニューサウスウェールズ州に少年赤十字団が結成されたという²。一方、1917年に参戦したアメリカでは、ウィルソン大統領の呼びかけに応えて³、少年赤十字の団員数が急増し、1916年には約23万人、1917年には約638万人、1918年には約2200万人⁴、そして1919年には約1100万人に減少したが、当時の全国の学童人口の半分まで達したという⁵。

この時期のアメリカの団員数と、カナダとオーストラリアの団員数を比較すると、その差が著しいものであったことがわかる。例えば、1920～21年、カナダの団員数は約6万8千人、オーストラリアの団員数は約3万6千人であったという⁶。こうして創立から間もない時期からアメリカ少年赤十字は、団員数の面に

において先頭を切る立場にあり、それ以降、団員数が激減した時期でさえ、世界一位を誇っていた。

さらに、第一次世界大戦中と終戦直後、アメリカの子どもたちがヨーロッパ諸国の子どもたちの救護の一環として、クリスマスボックスや手紙などの慰問品を送り、ヨーロッパの子どもたちがそのお礼として感謝の手紙や贈物をアメリカへ送った。この事実は、少年赤十字の歴史において、国際通信交換の始まり、世界各国の子どもたちの国際的友情の始まりとして位置付けられ、アメリカ側の資料においても、日本側の資料においても重要視されている出来事である⁷。アメリカへ届いた答礼品の数からは、この時期にアメリカの団員たちが行った贈物の発送の規模がうかがえる。例えば、戦時中大きな被害を受けたポーランドからは、約100万点の贈物が届き、その中には感謝の手紙の他に、手工芸品（クリスマスツリーの飾り、木彫工芸品、手作りの刺繍とレース、ハンカチ、紙花など）やポーランドの民族衣装をまとった人形があったという⁸。11月24日の感謝祭にちなんでアメリカへ発送されたこれらの贈物は、大きな反響を呼んだ⁹。このように、アメリカ少年赤十字の創立当初からの活動の規模は、団員数と答礼品の数からうかがい知ることができる。

したがって、世界各国における少年赤十字運動の実相を明らかにするには、アメリカ少年赤十字の活動と規模を把握することが不可欠である。さらに、アメリカ少年赤十字は、日本少年赤十字と盛んに交流を行い、この交流が両国にとって重要なものであったため、日本少年赤十字の活動を明確にするためにもアメリカ少年赤十字の実態を把握することが重要である。

ただ、アメリカ少年赤十字に関する先行研究においては、第一次世界大戦中と終戦直後の活動、つまり創立から間もない時期の活動に注目が集まり、1920年代後半～1930年代の実態は明らかにされていない¹⁰。しかし、この時期こそアメリカ少年赤十字の国際通信交換が最も活発に行われた時期であり、団員たちの国際文化交流の実態を明らかにするには重要な期間である。

したがって、本研究は、1920～30年代におけるアメリカ少年赤十字の国際通信交換の歴史に注目し、活動の規模と範囲、交流の相手国などを通して、アメリカ少年赤十字の国際活動を捉えることを目的とする。なお、1920～30年代にお

ける団員数の変化と、国際通信交換の主要な交流相手国については前稿で詳しく述べたため、以下では分析の結果のみをまとめておきたい¹¹。

1919年は、アメリカ少年赤十字の団員数がピークに達した年であった。戦時中の救済活動が当時重要視されたため、非常に多くの子どもたちが少年赤十字に入団したと思われる。その後、スイスのジュネーブ赤十字社連盟の第1回総会において「少年赤十字」が正式に創立された1922年には、団員数が約448万人に激減し、1919年の団員数の2分の1以下となった。これは、アメリカ少年赤十字が戦時中に使命を果たすできで、平時における活動は不要であると考えられていたことと、平時の活動¹²に関する情報がまだ教育者と子どもたちの間で広まっていなかったことが原因だと思われる。1922年以降は、団員数が緩やかに上昇した。

さらに、国際通信交換におけるアメリカの主要な交流相手国を、交流回数の多い順に10位まで並べると、一位は日本、次いでチェコスロバキア、ポーランド、カナダ、フランス、イタリア、南アフリカ、オーストラリア、ギリシャ、ユーゴスラビアであった。また、一位の日本は、二位のチェコスロバキアと比べて、交流回数が3倍以上多かったこともわかった¹³。これによって、アメリカ少年赤十字の国際通信交換で、どの国が重要な位置を占めていたのかが明らかになったし、日本との交流がいかに活発であったかも確認できた。

さらに、前稿では、アメリカ少年赤十字の全国の団員数の推移を取り上げたが、各州の少年赤十字の団員数と、学童人口に占める割合には触れていなかった。本研究ノートではこれらの点に注目し、その理由の検討も行いたい。

国際通信交換を通して、アメリカの団員たちが、日本をはじめ多くの国と交流を行い、アメリカの価値観と文化を伝えようとしていた。その価値観と文化は海外においてアメリカ全国の価値観として受け止められ、アメリカのイメージ形成へ貢献したと推測される。しかし、実際はアメリカ少年赤十字を通して海外へ伝わったのは、ある特定の地域の人々が共有していた価値観であったという可能性がある。本研究ノートでは各州の少年赤十字の団員数と、学童人口に占める割合を通して、この可能性を検討したものである。

また、アメリカ国内においても少年赤十字の通信交換（アメリカ各地の学校の

間の通信物の交換)を通して、各国からの移民の子どもたちにアメリカの価値観が植え付けられ、“アメリカ化”が行われたと先行研究ではすでに指摘されている¹⁴。ただ、こうした価値観を共有していたのは、ある特定の地域の人々のみであった可能性がある。

さらに、本研究の今後の課題の一つは、世界各国における少年赤十字運動の拡大を追っていくということである。先行研究では国際通信交換に参加した国と地域の数のみが示され、その多さに基づいて、少年赤十字の運動は国際的な運動であったと主張されている。しかし、少なくとも日本の場合は、交流が活発であった国と数回しか交流を行わなかった国があり、交流相手国には明らかな偏りがあったと筆者は拙稿においてすでに示した¹⁵。おそらく、国際通信交換に積極的に参加した国、少年赤十字の運動が盛んであった国、限られた地域でしか広まらなかった国など、その国によって拡大と活動の特徴があると思われる。今回は、アメリカに注目し、国内における拡大を検討注したが、今後はその他の国における拡大、アメリカとの比較を行う予定である。以上の3点は、世界各国における少年赤十字の特徴をより明確にする点であり、注目に値する課題であると思われる。

2. 各州における少年赤十字の団員数

以下の図1は、アメリカの各州における少年赤十字の団員数を示したものである¹⁶。

アメリカ各州における少年赤十字の人気の程度を測るために、筆者が17年間(1924～41年)の団員数を累計したものだ。とりわけアメリカのどの州において団員が最も多かったのかを、この図で示した。団員数の多い州は、1924～41年に少年赤十字の人気の最も高かった地域だと考えられる。なお、掲載の都合上、アラスカ州、そして当時アメリカの準州ないし自治領であったハワイ、グアム、サモア、プエルトリコ、フィリピン、ヴァージン諸島、パナマ運河地帯などを省略した。これらの地域については別稿に譲ることとする。

ちなみに、第二次世界大戦が近づくと、アメリカ少年赤十字団員が少ない州においても、団員数の増加傾向が見られる。例えば、アメリカの西部にあるユタ州

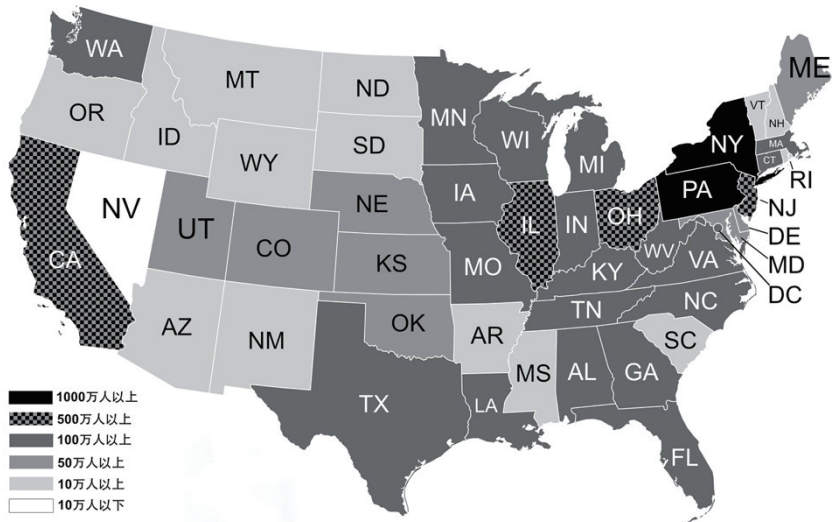


図 1：アメリカの各州における少年赤十字の団員数（1924～41年）¹⁷

(UT) の団員数は、1924 年には約 4 千人（同年のニューヨーク州は約 40 万人）だったが、1941 年には約 7 万 8 千人（同年のニューヨーク州は約 90 万人）であり、18 倍の増加が見られる。こうした増加があったことや州によって増加速度が異なっていたことを念頭に入れつつ、少年赤十字運動の拡大の全体像を把握しておきたいと考えたため、前述の計算を行った。

図 1 からわかるように、アメリカにおける少年赤十字の運動は、ミネソタ州 (MN)、アイオワ州 (IA)、ミズーリ州 (MO) を含む東部地域と、西海岸のカリフォルニア州 (CA) を中心に拡大していた。17 年間の団員数の累計は、ペンシルベニア州 (PA)、ニューヨーク州 (NY) で 1000 万人以上、カリフォルニア州 (CA)、イリノイ州 (IL)、オハイオ州 (OH)、ニュージャージー州 (NJ) で 500 万人以上であった。

さらに、各州の学童総数に占める少年赤十字団員の割合を見ると、50% 以上はワシントン D.C.、40% 以上はニューヨーク州 (NY) とニュージャージー州 (NJ)、30% 以上はイリノイ州 (IL)、ペンシルベニア州 (PA)、マサチューセツ

ツ州 (MA)、コネチカット州 (CT)、ワシントン州 (WA)、カリフォルニア州 (CA) であった。つまり、学童総数に占める 40% の割合でも東部地域に偏りが見られ、30% 以上の場合は、東部の州だけではなく、ワシントン州 (WA)、カリフォルニア州 (CA) も含まれることになる。

先行研究では、アメリカ少年赤十字が全国的な人気を博し、全国に広がったと主張されることが多いが¹⁸、こうして団員数の分布図を作成すると、偏りがあることが明らかになる。つまり、創立から間もない時期には運動が全国的なものだったとしても、平時の活動が中心となった 1920 年代後半～1930 年代には、活動の拠点がカリフォルニア州と東部地域になったことがわかる。

では、アメリカ各州と日本との間では、少年赤十字の交流はどの程度活発だったのだろうか。ちなみに、日本少年赤十字雑誌の内容からは、どの州と日本の交流が最も盛んであったのかを判断するのは難しい。雑誌には贈物がどの州から送られたのかは示されていないことが多く、多様性を見せるために、実際には贈物が少なかった地域が選ばれ、そこからの贈物が雑誌に掲載されたりする傾向が見られる。それでも、アメリカからの通信交換品が多い中、カリフォルニア州や東部地域から贈物が届いたという記述はやはり目立つ。カリフォルニア州の場合は、日本への郵送が便利だったことに加え、同州が 1924～41 年に累計団員数 300 万人以上を誇る赤十字運動の中心地の一つであったことがその理由と考えられる。一方、東部地域では、アメリカ赤十字本部がワシントン D.C. に設置されていたことや、大人の赤十字の団員数が東部地域に多かったことが、この地域の団員の活発な通信交換の要因だったと推測できる。

もう一つの理由は、19 世紀末にアメリカで起こった教育改革運動の影響で、進歩主義教育 (Progressive Education) が拡大していたことと関係していると思われる¹⁹。実際進歩主義教育で重要視されていた経験主義教育と児童主義教育、国際的な精神を育む教育は少年赤十字の活動の基礎となっていた。子どもたちが他国と通信交換を行い、世界平和と国際親善を実現しようとすることはそのような活動の一環として考えられていたのである。アメリカ少年赤十字の活動が最も活発であった 1920～30 年代に、進歩主義教育の理念を共有し、国際親善の活動を中心に活躍していた団体や組織、あるいは国際親善に関する研究と教育を行

なっていた組織が多数存在し、その拠点が東部地域やカリフォルニア州にあったことも確認できる。以下で、いくつかの例を挙げてみよう。

例えば、アメリカ学校平和同盟²⁰（マサチューセッツ州ボストン市）、国際連盟無党派協会²¹（ニューヨーク州ニューヨーク市）、連邦キリスト教会²²（ニューヨーク州ニューヨーク市）、国際連盟国際知的協力委員会²³（ワシントン D.C.）、ユネスコ国際教育局²⁴（ワシントン D.C.）、視聴覚教育協会²⁵（イリノイ州シカゴ市）などがある。また、カーネギー研究所（ワシントン D.C.）、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ（ニューヨーク州ニューヨーク市）、スタンフォード大学フーヴァー研究所（カリフォルニア州スタンフォード市）、ロサンゼルス市学校国際親善協会²⁶（カリフォルニア州ロサンゼルス市）では、進歩主義教育を実践できる教員の育成や、教育方法の研究などが行われていた。

つまり、進歩主義教育の普及が少年赤十字の団員数の分布に影響を与えたと容易に推測できる。

3. おわりに

本研究ノートにおいて次のことを示した。アメリカ少年赤十字は、東部の州（特にペンシルベニア州、ニューヨーク州）とカリフォルニア州に団員数が最も多く、学童総数に占める少年赤十字の割合も、これらの州が最も高かったことがわかった。つまり、アメリカにおいて少年赤十字運動が最も盛んだった地域が上記の地域であったことが明らかになった。その理由としては、赤十字団員数の他に、少年赤十字の活動で重要視されていた経験主義教育と児童主義教育、そして社会奉仕に基づいた体験型の教育手法を推進する進歩主義教育の拠点が、東部地域とカリフォルニア州にあったからだと考えられる。少年赤十字団は学校教員と赤十字団員を指導者とする団体であったため、これらの地域に進歩主義教育の手法の実習を受けた教員や大人の赤十字団員の数が多かったことが、少年赤十字運動の拡大と隆盛に寄与していたと思われる。

最後になるが、今後の課題を示したい。まずは、少年赤十字の国際通信交換が始まる以前に似たような試みが存在したのか、注目に値する。また、アメリカと同じように、日本少年赤十字の場合も、団員数の分布に偏りがあったのか否かに

についても検討したい。

注

- 1 1914年という記録もある。
- 2 The Canadian Red Cross Society, *Annual Report*, Toronto: The Canadian Red Cross Society (1927) p. 14; Baxter Sackett, E., *The Administration of the International School Correspondence of the Junior Red Cross*, PhD, New York: Columbia University (1931) p. 4.
- 3 “The President Proclamation,” *The Baltimore Sun*, 19 Sep. 1917, p. 2.
- 4 Irwin, J. F., *Making the World Safe: The American Red Cross and a Nation’s Humanitarian Awakening*, New York: Oxford University Press on Demand (2013) (a) p. 73.
- 5 Irwin, J. F., “Teaching ‘Americanism with a World Perspective’: The Junior Red Cross in the U.S. Schools from 1917 to the 1920s,” *History of Education Quarterly*, 53-3, Cambridge: Cambridge University Press (2013) (b) p. 253.
- 6 American National Red Cross, *Annual Report*, Washington D.C.: American National Red Cross (1921) p. 49; Canadian Red Cross Society, *Annual Report of the Canadian Red Cross Society*, Toronto: Headquarters of the Canadian Red Cross Society (1921) p. 31; Oppenheimer, M., *The Power of Humanity: 100 Years of Australian Red Cross*, Melbourne: Harper Collins (2014) p. 73.
- 7 例として次の資料を挙げられる。「学校通信は友を授ける道」(『少年赤十字 = The Japan Junior Red Cross』第15巻第3号、日本赤十字社、1940年) 17頁。
- 8 “Wdzięczność. Dzieci Polski—dzieciom Ameryki.” *Czerwony Krzyż*, Vol.IV, No. 23-24, Warszawa : Biuro Zarządu Głównego, Dec. 1921, pp. 535-537.
- 9 「学校通信は友を授ける道」(『少年赤十字 = The Japan Junior Red Cross』第15巻第3号、日本赤十字社、1940年) 17頁。
- 10 Little, B., “A Child’s Army of Millions: The American Junior Red Cross.” *Children’s Literature and Culture of the First World War*. New York: Routledge, Taylor & Francis Group (2016) Kindle edition, pp. 283-300; Irwin., *op.cit.*, 2013 (a), Irwin.; *op.cit.*, 2013 (b).
- 11 拙稿「1920～30年代におけるアメリカ少年赤十字の国際通信交換（一）－団員数の変化と各国との関係－」(『第8回日本語・日本文化国際フォーラム論文集』、2020年) 178-187頁。
- 12 「健康の保持と促進」、「社会奉仕」、国際通信交換を通して行われた「国際理解と国際親善の活動」。
- 13 アメリカと世界各国の間の国際通信交換の回数は、1926～44年(1929～34年と

- 1937～38年を除いて）の通信物の総回数（受信と発信を合わせた回数）を合わせて、筆者が統計データに基づいて計算した。詳細は、注11の拙稿を参照いただきたい。
- 14 少年赤十字の通信交換による“アメリカ化”については、前述のジュリア・イルヴィン 2013b、またカナダにおける移民と先住民族の子どもたちの“カナダ化”については、ナンシー・シーハン 1987 に詳しい（Sheehan, Nancy M. “Junior Red Cross in the Schools: An International Movement, a Voluntary Agency, and Curriculum Change,” *Curriculum Inquiry*, Vol. 17, No. 3, London: Taylor & Francis, 1987, pp. 247-266）。
 - 15 拙稿「1920～30年代における日本少年赤十字の“国際通信交換”」（『問谷論集』第14号、日本語日本文化教育研究会、2020年）1-25頁。
 - 16 図1において使用した各州の州名の略称は以下の通りである。提示順番は西から東へとした。ワシントン州（WA）、オレゴン州（OR）、カリフォルニア州（CA）、モンタナ州（MT）、アイダホ州（ID）、ネバダ州（NV）、ワイオミング州（WY）、ユタ州（UT）、アリゾナ州（AZ）、コロラド州（CO）、ニューメキシコ州（NM）、ノースダコタ州（ND）、サウスダコタ州（SD）、ネブラスカ州（NB）、カンザス州（KS）、オクラホマ州（OK）、テキサス州（TX）、ミネソタ州（MN）、アイオワ州（IA）、ミズーリ州（MO）、アーカンソー州（AR）、ルイジアナ州（LA）、ウィスコンシン州（WI）、イリノイ州（IL）、ミシガン州（MI）、インディアナ州（IN）、ケンタッキー州（KY）、テネシー州（TN）、ミシシッピ州（MS）、アラバマ州（AL）、オハイオ州（OH）、ペンシルベニア州（PA）、メリーランド州（MD）、デラウェア州（DE）、ニュージャージー州（NJ）、ニューヨーク州（NY）、コネチカット州（CT）、ロードアイランド州（RI）、マサチューセッツ州（MA）、ニューハンプシャー州（NH）、バーモント州（VT）、メイン州（ME）、ウェストバージニア州（WV）、バージニア州（VA）、ノースカロライナ州（NC）、サウスカロライナ州（SC）、ジョージア州（GA）、フロリダ州（FL）
 - 17 American National Red Cross. *Annual Report*, Washington D.C.: American National Red Cross, 1921-1941.
 - 18 例えば、1919年の団員数について、前述のブランドン・リトル 2016 とジュリア・イルヴィン 2013b は、この年の団員総数は約1100万人に達し、アリゾナ、カリフォルニア、ネヴァダ、デラウェアの4州では、全ての学校が少年赤十字に加盟し、それとはまた別の28州では半分以上の学校が加盟していたと指摘し、これ以上の説明を加えていない。
 - 19 19世紀末にアメリカで起こった教育改革運動が、アメリカとカナダにおいて少年赤十字の理念に影響を与え、進歩主義教育の拡大が両国の少年赤十字の活動の基礎になったということについては、前述のナンシー・シーハン 1987 に詳しい（注14参照）。
 - 20 American School Peace League, 後に The American School Citizenship League に改名。1908年創立。この団体の目標は、外国の学校との通信物の交換、国際親善をテーマにした

授業用の教材の作成と提供、国際親善に関する書物の出版などであった。

- 21 League of Nations Non-Partisan Association, 1929年にLeague of Nations Associationに改名。1923年創立。国間の友情関係の深化に関する書物の出版、教育用の映画やスライドの貸出などを目的とした。
- 22 The Federal Council of Churches of Christ in America, 後にNational Council of Churches of Christ (米国キリスト教会協議会)に改名。1908年創立。1926～27年に日米親善人形交流を主催し、日米関係の深化を図った組織である。日米親善人形交流の際にアメリカから日本へ送られた人形の多くは、東部地域とカリフォルニア州から贈られた。オハイオ州、ペンシルベニア州、ニューヨーク州からは1千5百体以上の人形が贈られ、人形の数が最も多かった3州であったという事実が興味深い。日米親善人形交流に関する先行研究においては、米国キリスト教会協議会の活動の拠点がニューヨーク市にあったからこのような偏りが生じたと述べられているが、人形に関する情報の伝達と人形の収集の際に少年赤十字のネットワークが利用されたという仮説も立てられる。この仮説の検証は今後の課題にしたい。
- 23 League of Nations, International Committee on Intellectual Cooperation. 1922年創立。本部はスイス・ジュネーヴであり、アメリカにおける活動の拠点は、ワシントンD.C.であった。
- 24 International Bureau of Education. 1925年に活動開始。本部はスイス・ジュネーヴであり、世界各国の教師の交流の活性化、国際的視野を取り入れたカリキュラムの開発などを目的とした。
- 25 Society for Visual Education. 1919年創立。体験教育の実践を目的に、学校教育用の映画作成と貸出を行った。1920年代～30年代前半は、映画視聴が体験教育の一つの手段としてみなされた。
- 26 The Community of World Friendship of the Los Angeles City Schools. 1926～27年に日米親善を図るために、両国の学校の生徒間の贈物交換を行った団体である。

付 記

本研究は科学研究費助成事業（若手研究）課題番号：19K13318の助成を受けたものである。

ベレジコワ タチアナ（大阪大学日本語日本文化教育センター）

**Title International School Correspondence of the American
Junior Red Cross during the 1920s and the 1930s (2):
Focusing on membership in the states of the US**

BEREZIKOVA Tatiana

In the US the Junior Red Cross movement started in 1917 during the First World War, and was established officially in 1922. It very soon became one of the most recognizable organizations in the world. Its main goals – promotion of health, work for community and international friendliness – were shared by many American children. The third goal – international friendliness – was conducted through exchanges of international correspondence and these exchanges were considered as an important way to create a world peace and international understanding.

From the very beginning the American Junior Red Cross was the first in the world by the number of members. In the second half of the 1920s and the 1930s the American Junior Red Cross took a very active part in international cultural exchanges of correspondence. Hence, to understand the Junior Red Cross movement in the world it is essential to grasp distinctiveness of this movement in the United States. This research note explores the development of the American Junior Red Cross by focusing on membership and its distribution with the aim of trying to understand the real scale of the movement in the US.

